彼女は知らない

蟹球リク

人　物

山中祥太（９）小学三年生
佐々木雄輔（９）小学三年生
鈴木理沙（９）小学三年生

倉田洋子（４５）担任

児童Ａ（９）小学三年生
児童Ｂ（９）小学三年生
児童Ｃ（９）小学三年生

○第三小学校・３年１組・中（朝）

３年１組の教室の中。

３０人ほどの児童が、席に座ったり追いかけっこをしたり、思い思いに過ごしている。

山中祥太（９）が、席に座って本を読んでいる。

そこにランドセルを背負った佐々木雄輔（９）がやってきて。

雄輔「おう」

祥太「あ、おはよう」

雄輔、机に手を置いて、祥太に顔を近づけて。

雄輔「言ってないよな？」

祥太「何の話？」

雄輔「とぼけんなよ。昨日のだよ」

祥太「もちろん言ってないよ」

雄輔「母ちゃんにも？」

祥太「お母さんにも言ってないよ」

すると、倉田洋子（４５）が教室に入

ってきて。

洋子「はーい、朝の会始めまーす」

雄輔、洋子をちらっと見て、祥太に視線を戻して。

雄輔「絶対言うなよ」

雄輔、自分の席へ。

雄輔、祥太の右斜め前の方の席に座る。

祥太、読んでいた本を机の中にしまいながら。

祥太「言わないよ」

児童たちが席に着く。

洋子「日直さんお願いします」

児童Ａ「起立」

児童たち、立ち上がる。

○同・花壇（朝）

第三小学校の花壇。

ひまわりが枯れかけている。

○同・３年１組・中（朝）

３年１組の教室の中。

朝の会をしている。

祥太は真剣に洋子の話を聴いている。

雄輔は洋子の話を聴かず、隣の席の児童と、こそこそおしゃべりをしている。

洋子「最後ですが、昨日万引きがあったと、坂上さんからご連絡がありました」

祥太、思わず洋子から視線を逸らしてしまう。

洋子「ほんとうに残念です。前も言いましたが、万引きは犯罪です。絶対にしてはいけない」

祥太、洋子を見ることができず、机を見つめている。

すると洋子、黒板をバンと叩いて。

洋子「静かに！」

雄輔「（舌打ち）」

雄輔、おしゃべりをやめる。

祥太、黒板を叩いた音にビクッとして、思わず顔を上げて洋子を見る。

洋子「とにかく、絶対に万引きをしないように」

児童たちを見回しながら話していた洋子の目と祥太の目が合う。

洋子「いないとは思うけど、もしこの中に万引きした人がいたら、職員室まで来てください」

祥太、洋子から視線を外すことができない。

洋子「それでは朝の会終わります。日直さんお願いします」

児童Ａ「起立」

児童たち、立ち上がる。

祥太、若干遅れて立ち上がる。

○同・廊下（朝）

授業と授業の間。

廊下には、トイレに向かったり追いか

けっこをしたりする児童たち。

○同・3年1組・中（朝）

授業と授業の間。

児童たちは、おしゃべりをしたり本を読んだり、思い思いに過ごしている。

雄輔は、教室の後ろで、男子児童二人とおしゃべりをしている。

祥太、自分の席に座りながら雄輔を見る。

すると、隣の席の鈴木理沙（9）が話しかけてきて。

理沙「ねえねえ祥太くん」

祥太、雄輔から見たままで。

祥太「うん？」

理沙「次の国語の教科書忘れてきちゃって」

祥太「うん」

理沙「教科書見せてくれない？」

祥太「……うん？」

理沙「聞いてる？」

祥太「……うん」
理沙、祥太の肩を揺すって。
理沙「ねえ」
祥太「ごめんごめん」
祥太、理沙を見て。
祥太「えっとなんだっけ」
理沙「次、国語の教科書見せてちょうだい」
祥太「いいよ」
祥太、雄輔に視線を戻す。
理沙「さっきから全然聞いてくれないじゃん。だれ見てるの？」
祥太「うん」
理沙「え、好きな人？」
理沙、祥太が見ている方を見て。
理沙「え、佳奈のこと好きなの？」
祥太「違うよ。佳奈さんの奥。雄輔を見てる」
理沙「……え、好きな人、雄輔くん？」
祥太「違うよ。そんなわけないでしょ」
すると、雄輔と話していた男子児童二

人が教室を出て行って、雄輔が一人になる。

それを見た祥太。

祥太「ちょっとごめん」

祥太、席を立って雄輔の方へ。

教室の後方で一人になった雄輔。

そこに祥太がやってきて話しかける。

祥太「雄輔」

雄輔「おう」

祥太「大丈夫かな」

雄輔「大丈夫だろ」

祥太「でも、連絡があったって」

雄輔「連絡があっただけだろ。おれらってバレてないから大丈夫だよ」

祥太、下を向いて。

祥太「そうかな」

雄輔「なに。疑ってんの？」

祥太「そういうわけじゃないけど……。倉田先生が話してたとき、おれの方見てた気がして」

雄輔「はあ？なんだよそれ。気のせいじゃねえの」

祥太「いや、ほんとに見てたんだって」

雄輔「見てたからなんだよ。じゃあな。もうこの話すんなよ」

雄輔、祥太を置いて一人で席へ戻る。

祥太、雄輔の背中を見送りながら。

祥太「大丈夫かな……」

○同・校庭

中休み。

児童たちが、校庭へ飛び出していく。

○同・３年１組・中

黒板に『中休み（１０：２５～１０：４０）』と書かれている。

思い思いに過ごす児童たち。

祥太は席で本を読んでいる。

サッカーボールを持った雄輔が、男子児童たちに話しかけて。

雄輔「早く行こうぜ」

すると、校内放送が入って。

洋子の声「3年1組の山中祥太くんと佐々木雄輔くん。すぐに職員室の倉田のところに来てください」

祥太、放送を聞いて表情が硬くなる。

理沙「祥太くん、呼ばれてるよ」

祥太「う、うん」

祥太、雄輔を見る。

児童B「雄輔、呼ばれてるぜ」

雄輔「めんどくせえなあ。サッカーしてから行くわ」

児童C「いいのかよ」

雄輔「まあ大丈夫だろ」

それを見ていた祥太。

祥太「雄輔、雄輔」

祥太、雄輔のところへ行って。

祥太「先生のところ行かないの？」

雄輔「めんどいから後で行くわ」

祥太「……やっぱりバレたんじゃ」

児童B「なに、バレたって」
雄輔「なんでもない」
雄輔、祥太に小声で。
雄輔「余計なこと言うなよ」
祥太「やっぱりバレたんだよ。先生と目合ったし」
雄輔「またその話かよ。心配性だな」
祥太「雄輔、一緒に行こう」
雄輔「うるさいな」
雄輔、祥太に肩パンをする。
雄輔「行きたいなら一人で行ってこいよ。おれはサッカーするからな」
雄輔、男子児童たちと教室の外へ。
肩を抑えて俯く祥太。
そこに理沙がやってきて。
理沙「祥太くん大丈夫？」
祥太「うん……」
泣きそうな表情の祥太。